

氏 名：矢野 真理

学位の種類：博士（看護学）

学位記番号：甲 第1号

学位授与年月日：平成31年3月7日

学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当

論文題目：急性期病院の熟練看護師が行うエンド・オブ・ライフケアにおける  
超高齢者の療養場所選択についての意思決定支援の構造

Structure of Decision Support for the Oldest Old by Expert  
Nurses in the Selection of Care Location During End of Life Care  
in Acute Hospitals

論文審査員：主査 本田 多美枝

副査 小林 裕美 （主研究指導教員）

副査 西片 久美子 （第1副研究指導教員）

副査 石崎 智子

副査 眞崎 直子

## 論文内容の要旨

### 【研究の背景】

わが国は、超高齢社会を迎え、人生の終焉をいかに支えるかが医療や社会にとって大きな課題になっている。最善の終末期が実現されるよう、病む人・痛む人に伴走することを使命とする看護師がとりわけ大きな役割を担うことは言うまでもない。高齢化率が27.7%（総務省, 2017）を超えたわが国において、超高齢者（85歳以上の高齢者；以下、超高齢者）が何らかの症状を発すると、多くは急性期病院に入院する。在院日数の短縮化の中で、超高齢者とその家族は、短期間のうちに退院後の療養場所を決定することが求められる。その対応として、病院では退院支援看護師の配置など努力は払われているが、患者と常に接しているわけではない退院支援看護師にとって、意思を明確に表明しない、あるいはできない超高齢者の希望をくみ取るとは非常に困難である（原田, 松田, 長畑, 2014）。それ故、患者や家族を最も近くで観察している病棟の熟練看護師が、患者・家族の意思をどのようにくみ取り、療養場所選択についての意思決定支援を行っているのかを明らかにすることは、超高齢者のエンド・オブ・ライフケアを考える上で非常に有用であると考えた。

### 【研究目的】

本研究の目的は、エンド・オブ・ライフケアにおける超高齢者の療養場所選択に対する意思決定支援を行うために、急性期病院の熟練看護師が超高齢者と家族の意思をどのようにくみ取り、意思決定支援を実践しているかについての構造を明らかにすることである。

## 【研究方法】

本研究は、質的統合法(KJ 法)を用いた質的探索的研究デザインである。研究参加者は、急性期病院の一般病棟（5 か所）に勤務し、高齢者看護に携わった経験 10 年以上の熟練看護師とした。データ収集方法は、1 人につき 1 回（平均 64 分）の半構造化面接法であり、データ収集期間は 2018 年 2 月～2018 年 8 月であった。分析は、逐語録をもとに質的統合法（KJ 法）を用いて行い、そのプロセスは、ラベル作成、グループ編成、最終ラベルの抽出とシンボルマークの記述、最終ラベル間の関係性による図解、図解の叙述化である。研究参加者毎の個別分析の後、総合分析を行った。

本研究は日本赤十字九州国際看護大学の研究倫理審査委員会(承認番号 17-025)及び共同看護学専攻研究倫理審査委員会(承認番号 17-03)の承認を得て実施した。

## 【結果】

研究参加者は 10 名であり、看護師経験年数は 12～29 年(平均 18.7 年)であった。

### A. 個別分析の結果

10 名のうち、代表例として 4 名の概略を記述する。N1 氏は、超高齢者を枠にはめずに捉えるとともに超高齢者の傾向を踏まえて関わっていた。さらに、超高齢者の療養場所の決定は、終焉を生きる場所の選択になることを意識して本人の生き方を尊重し、近親者と意向の調整を行っていた。N2 氏は、超高齢者の見えにくい意思を探ろうとする実践が特徴であり、こっそり囁く言葉に超高齢者の本心があると考えたり、超高齢者が歩行訓練をする姿から帰宅に向けての意思を捉えたりしていた。また、超高齢者には、医療者には見せない頑固さや家族に言わない本心があることも理解していた。N3 氏は、入院中の超高齢者の落ち着いた言動を読み解き、表現できない帰りたい気持ちを理解したり、セルフケアを維持しようとする意欲が自宅に帰る原動力であると判断したりしていた。さらに、退院のタイミングなどについては、躊躇せず自分の意見を医師に伝えるなどの積極的な行動が際立っていた。N4 氏は、超高齢者の年齢ゆえの本音を身内に置き換えて想像し、さらには超高齢者を取り巻くすべての人の心情を重視する支援が特徴であった。

### B. 総合分析の結果

総合分析の結果、6 枚の最終ラベルが抽出され、シンボルマークの記述および図解の叙述化から、以下のことが明らかとなった。なお、【 】はシンボルマークを示す。

急性期病院の病棟看護師は、超高齢者の意思決定支援を行うにあたって、【超高齢者への理解の追求】と【家族への理解の追求】つまりは、超高齢者の本心と家族の心情を両方から理解しようと努め、本人の気持ちの揺れや家族との気持ちのずれ、多様な価値観のすり合わせを行うことで【療養場所決定の中にある本人の尊厳】を尊重しようと試みていた。同時に、

看護師は、超高齢者の療養場所を考える際には、医師への敬意や忠誠心など超高齢者世代の特性を踏まえた【超高齢者側から見た最適医療】と、医師の責任のもとで進められる治療や余命告知など【医療側から見た最適医療】のそれぞれの視点から捉え、超高齢者の希望する場所での療養が実現されるよう、看護師として医療の加減を見定め、調整を行うことで【病院医療依存の中にある本人の尊厳】を尊重しようとしていた。超高齢者の療養場所選択は、終焉の場となる可能性があり、病院医療に依存した超高齢者が迎える転機を予測できるからこそ、療養場所選択の意思決定支援の中心は、超高齢者の尊厳追求であった。

### 【考察】

【療養場所決定の中にある本人の尊厳】を尊重するために、【超高齢者への理解の追求】と【家族への理解の追求】の両面から超高齢者を捉えようとする実践には、看護師の学ぶ姿勢や役割意識の高さが関係していた。従って、これらは、看護師の『学ぶ姿勢が生み出す実践知』であると捉えられた。一方で、超高齢者の療養場所を考える際には、【超高齢者側から見た最適医療】と【医療者側から見た最適医療】の双方の視点が有益であったことから、看護師には、入院中の超高齢者の世界観を多方面から理解できる洞察力や、退院後も継続する医療行為が療養場所に及ぼす影響を予測する力、チーム医療の中で調整し連携する力が求められる。従って、超高齢者の療養場所選択に対する意思決定支援は、病院医療依存傾向にある中で超高齢者の希望が叶えられるよう模索する支援であり、『超高齢者医療のあり様への挑戦』であると捉えた。さらに、超高齢者の療養場所選択は、終焉の場となる可能性もあることから、看護師は可能な限り本人の尊厳を尊重し、希望を叶えたいと考えていた。つまり、必ずしも超高齢者の希望する療養場所への移行ができていない現状があるからこそ、看護師は【病院医療依存の中にある本人の尊厳】という、『超高齢者の尊厳』を中心に据えた実践を行っていたと言える。

以上のことから、今後、病棟看護師が超高齢者の療養場所選択についての意思決定支援を行っていくためには、次の2点が重要であると示唆された。1つは、在宅看護の実践や研修を活かす教育の促進である。病棟看護師にとって、訪問看護などの在宅看護の経験は、次の療養場所に繋げる支援に有効であり、経験や研修を通して病院側と地域側が共有すべき有効な情報について明確に学ぶことが必要である。もう1つは、日頃の看護実践はもちろんのこと、看護以外の身内の在宅介護の体験など、多方面からの体験をリフレクションすることを取り入れた教育方法を開発することが必要である。超高齢者の療養場所選択の意思決定支援は、熟練看護師の学ぶ姿勢があったからこそ成し得ており、このようなリフレクションを取り入れた教育方法を開発できれば、病棟看護師がそれぞれの実践から学び、超高齢者の特徴を踏まえた意思決定支援が実現できていくものと考えている。

# 論文審査の結果の要旨

本研究は、超高齢社会を背景に、病む人の人生の終焉をいかに支えるかというエンド・オブ・ライフケアにおいて、看護職への役割期待がますます大きくなる中で、急性期病院に入院している超高齢者の療養場所選択に対する熟練看護師の意思決定支援に焦点を当てたことは、今日的な課題であり、社会的意義があるとの評価を得た。さらに、退院支援看護師ではなく、病棟看護師に着目した研究は未だ十分にはなされていない現状において、本来、複雑な営みであろう熟練看護師の意思決定支援の構造を描くことができたのは、本研究で採用した質的統合法（KJ法）によって、個別分析から総合分析へと、段階的かつ丁寧に分析を行ったことによるものであることも評価された。

また、本研究で得られた知見は、経験を積み重ね、かつその経験から学ぶ姿勢を持つ熟練看護師ゆえに成し得た実践であった。このことから、病棟看護師の多様な体験を意図的にリフレクションすることを取り入れた教育方法等の提案は、今後の病棟看護師に対する現任教育への貴重な示唆となり、この点も評価された。

今回の研究参加者は、一定地域にある急性期病院の病棟看護師に限られてはいたが、病院医療依存傾向にある中で、『超高齢者の尊厳』を中心に据えた『超高齢者医療のあり様への挑戦』は、どの地域の看護師にも非常に有用な視点を提示している。

以上、本研究は、適切かつ妥当な研究方法により、新規性のある知見が得られており、その内容は看護学の研究として独自性があり、社会的な意義があると評価した。

よって、本論文は、博士（看護学）の学位論文として価値あるものと認め、また、論文内容およびそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。